京師にかくれ居しに、板倉重宗京都に有て、丈山をいたはる事大かたならず、諸侯貴人の會する時、丈山を座上にまねきて、此老は文武の道に達せる人なりと敬禮せらる、其後比叡山の麓一乘寺に隱遯の地を設け、詩仙堂を作りて、詩人三十六人の像を壁に畫き、書籍を友として閑居す、後光明帝御卽位の時、松平伊豆守信綱賀使として、京都にまゐられしに、丈山と親戚たるゆゑ、たびたび閑居を訪れたり、承應元年七十歳に及て、三州泉の鄕は其故鄕たるゆゑ、歸るべき志あり、板倉重宗にかくといへども許さゞりしかば、今よりは京都へ再び出じ、さらば其許へも參られじとて、和歌あり、

わたらじなせみの小川は淺くとも老のなみそふかげもはづかし、後光明帝、丈山が隷書によきと聞し召、高木伊勢守守久勅命を傳へければ、八卦の字を書て奉る、上皇（後水尾）も又隷書の大字を書しめ酒肉を賜はる、寛文十二年壬子五月廿三日、一乘寺の閑居に終りたり、九十歳となり、

〔近世畸人傳〕僧桃水（此僧は西山和尚著せる一書有て、既に印行す、今は要を取て擧ゝ）

僧桃水、諱雲關、筑後國の人にして、肥前島原禪林寺に住持す、跡を匿して後、其行方をしるものなし、歸依の尼、國をいでゝかたゞを尋めぐりて、洛東四條河原に至る時、師菰うちかづきて、同じさまなる乞丐人の病るを、介抱してあられしに、涙を流して拜す、さて和尚のためにとて自紡績し、年を經て織たてたる臥具の背に負しを、とり出してまゐらするに、和尚今の身にしては、もちうる所なしといひてうけず、尼もさるものにて、自用給ふ所なくば、御心にまかせて、ともかくもし給へ、師に供養せるうへは、直にすてたまふもうらむ所なしといふ、さらばとてうけて、やがて病る乞丐にうちきせたまふを、他の乞丐人ども見て大に驚き、これは凡人にあらずといひて、俄にあがめたふとみければ、そこをもたちさり給ふ、そのころ弟子の兩僧も尋求ること三年にして、安井門前にて、乞丐の集たる中にて、みつけしかば、其あとにつきて、人なき所に至り、師もしか